

足立智美

『音響詩ソロ・パフォーマンス』

Adachi Tomomi

Sound Poetry Solo Performance

2022.8.7 Sun

愛知県芸術劇場 大リハーサル室

Large Rehearsal Room, Aichi Prefectural Art Theater



STILL ALIVE
国際芸術祭
あいち2022



©Guillaume Kerhervé// Maison de la Poésie de Nantes

足立智美

1972年石川県生まれ
ベルリン（ドイツ）拠点

パフォーマー、作曲家、音響詩人、楽器製作者、視覚芸術家。その多彩なスタイルで知られ、自身の声とエレクトロニクスによる作品、音響詩、即興演奏、現代音楽作品の上演から、サイト・スペシフィックな作曲、器楽作品、技術を持たない人々のための合唱曲などを、テート・モダン（ロンドン、英国）、ハンプルガー・バーンホフ美術館（ベルリン、ドイツ）、ボンビドゥー・センター（パリ、フランス）、ベルリン・ポエジー・フェスティバル（ドイツ）など世界各地で発表している。その作品には自作のインターフェイスから、人工知能、脳波、人工衛星、ツイッター、骨折、超常現象までもが用いられる。国際芸術祭「あいち2022」現代美術展では、音響、映像、ホログラム、3Dプリント技術などを駆使しながら、文字を見る、読む、聴く、触る、といった行為が絡み合う空間を構成する。さらに、パフォーミングアーツ公演では、ジョン・ケージの晩年の作品『ユーロペラ3&4』の演出も担当。

Adachi Tomomi

Born 1972 in Ishikawa, Japan
Based in Berlin, Germany

Adachi Tomomi is a performer, composer, sound poet, instrument builder, and visual artist. Known for his versatile style, he has performed his own voice and electronics pieces, sound poetry, improvised music and contemporary music works and also presented site-specific compositions, compositions for classical instrumental ensembles, and choir pieces for untrained musicians around the world, including Tate Modern (London, UK), MaerzMusik (Berlin, Germany), Hamburger Bahnhof Museum (Berlin, Germany), Centre Pompidou (Paris, France) and Poesiefestival Berlin (Germany). He uses a wide range of materials in his work, including self-made physical interfaces and instruments, artificial intelligence, brain waves, artificial satellite, Twitter texts, fractures, and even paranormal phenomena.

Adachi presents an intermedia space which is composed of the acts of seeing, reading, listening to and touching texts using audio, visual, hologram and 3D printing in the Contemporary Art exhibition. For Performing Arts program, Adachi will direct John Cage's late work, *Europeras 3 & 4*.

主な作品発表・受賞歴

- 2021 オペラ『ロミオがジュリエット』文化庁芸術祭、音楽部門大賞受賞（関西参加公演の部）
- 2019 アルス・エレクトロニカ、リンツ（オーストリア）、優秀賞受賞
- 2012 DAADベルリン芸術家プログラム招聘
- 2009 ACCの招聘によりニューヨーク滞在
- 2007 『ユーロペラ5』（日本初演）演出、サントリーサマーフェスティバル、東京

Selected Works & Awards

- 2021 Grand Prize for the opera *Romeo will juliet*, Agency for Cultural Affairs National Arts Festival – Music Division (Kansai section), Japan
- 2019 Award of Distinction, Ars Electronica, Linz, Austria
- 2012 Invited Composer of the DAAD Artists-in-Berlin Program, Berlin, Germany
- 2009 ACC Music Grant, New York, USA
- 2007 *Europera 5* (Japan premiere), Suntory Summer Festival, Tokyo, Japan

音響詩ソロ・パフォーマンス 足立智美

音響詩とは、詩と音楽の中間に位置するジャンルである。ひとつの源流は20世紀初頭の未来派、ダダの運動である。これらは美術の運動だと解されることが多いが、マリネッティもツァラもまずは詩人であったことを忘れてはならない。彼／彼女らは文法を破壊し、言葉を作り直し、タイプグラフィ、オノマトペを導入し新しい言語を創造した。

そこには意味に軸をおいた伝統的な書法に対する否定と、本質的な新しさへの欲求があるが、その背景には多言語体験の拡大があったことは間違いない。未知の言語に出会った時に最初にもたらされるのは何よりもその音と形であって、意味ではないのだから。

そして特筆したいのは同時期のペテルブルグを中心としたザウムの運動である。超意味言語と訳されるそれは、言葉の徹底した形式主義的な還元と新しい音の創造、それに独特の神秘主義が結びついたものだった（フレーブニコフはそれを鳥と神と星々の言葉だとしている）。この流れは最初のザウムによる創作をクルチョーヌイフに促したブルリュクによって日本にもたらされ、日本の未来派、ダダイズムの発展に影響を与えた（私の展示部門でのインターションはこの流れをその背景にしている）。

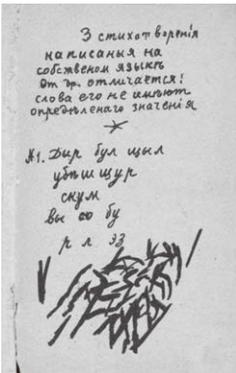
ダダイスト、クルト・シュヴィッターズはその大作“Ursonate”で音楽に範をとった反復と構造化によって、音響詩のコンセプトをおおきく推し進めた。具体主義の流れは理論的な位置づけを明快にし、言葉の物質的側面のうち音に着目したものを音響詩、視覚を重視したものを視覚詩と考えることを可能にした。

不思議なことに戦前の未来派、ダダイズムを除けば、日本では言葉の物質化という作業はほとんど行われることはなかったが、例外のひとつが新國誠一らによるASAであった。新國は海外の潮流とはほぼ無関係に音響詩、視覚詩の方法に1960年代初めには到達し、その後、国際的な交流に身を投じた。言葉の意味に依存しない音響詩、視覚詩の実践は、どこにも属さない言語の創造であり、それが故に全人類もしくは人類以外のための共通言語という側面を持っている。翻訳というプロセスを必要としないがゆえに、そのまま国際的なコミュニティと直接つながることができる。もうひとつ付け加えるならば、その起源に多言語体験をもつ音響詩、視覚詩は西ヨーロッパ、アメリカ中心に捉えられがちな20世紀芸術史において、周縁とみなされがちな地域で発達することが多い。南米や東ヨーロッパでのこの領域での成果は著しいものがある。

テクノロジーの発達にしたがった文学の概念の変化も見逃してはいけない。タイプライターで書かれた文章は手書きの文章と同じではないし、同じであってはいけない。アンリ・ショパンはタイプライター固有の視覚詩を制作するとともに、テープレコーダーとその編集技術を前提にテープに音響として詩を書く、という考えを確立した。現在においては人工知能やVRの活用はもっともこの領域での先端を示している。

今日のパフォーマンスでは以下の詩を朗読する。一部はエレクトロニクスによって時には極端に拡張されるが、どんな場合でも、もとの音素の持つ性質は保持されている。

- ヒデ・キノシタ（木下秀一郎） / -X-から始まった有聲音詩型（1924）
- Hugo Ball / Gadjji beri bimba（1916）
- Aleksei Kruchenykh / Dyr bul shchyl（1912）
- Olga Rozanova / 無題（1916?）
- Kurt Schwitters / Ursonate 第三楽章（1922-1932）（手話訳：足立智美）
- 新國誠一 / 「0音」より（1961-1963）
- John Cage / 62 Mesostics Re Merce Cunningham より（1971）
- 足立智美 / あなた5（2001）
- 松井茂 / 「音声詩作品集」より（2009）
- 足立智美 / 「 」(2013)
- 足立智美 / 人工知能 (tomomibot) との即興
- Ruth Wolf-Rehfeldt / 無題 (Wellen)（1970年代）
- 足立智美 / -X-で終わった有聲音詩型 -ヒデ・キノシタの -X-から始まった有聲音詩型による（2012）



Dyr bul shchyl by Aleksei Kruchenykh

出演：足立智美

制作：福永綾子 (ナヤ・コレクティブ)

舞台監督：尾崎聡

照明：中山奈美

音響：有馬純寿

記録映像：株式会社青空

記録写真：今井隆之

パフォーミングアーツ・アドバイザー：藤井明子 (国際芸術祭「あいち2022」)

制作：村松里実 (国際芸術祭「あいち2022」)

主催：国際芸術祭「あいち」組織委員会

共催：愛知県芸術劇場

Performer: Adachi Tomomi

Production Coordinator: Fukunaga Ayako (naya collective)

Stage Manager: Ozaki So

Lighting Designer: Nakayama Nami

Sound Designer: Arima Sumihisa

Video Documentation: AOZORA, LTD.

Photography: Imai Takayuki

Performingarts Adviser: Fujii Akiko (Aichi Triennale 2022)

Production Coordinator: Muramatsu Satomi (Aichi Triennale 2022)

Presented by Aichi Triennale Organizing Committee

Co-Presented by Aichi Prefectural Art Theater

*足立智美は、本公演のほか、現代美術展 (愛知芸術文化センター10階) にも参加しています。
<https://aichitriennale.jp/artists/adachi-tomomi.html>

Adachi Tomomi will also participate in the contemporary art exhibition at Aichi Arts Center (10F).

STILL ALIVE 国際芸術祭 あいち2022



国際芸術祭「あいち2022」 パフォーミングアーツ

アドバイザー：藤井明子、前田圭蔵
キュレーター：相馬千秋

プロダクションマネージャー：清水翼
コーディネーター：村松里実、谷口裕子、芝田暹、菅井一輝

テクニカル・コーディネーター：尾崎聡

票券：小森あや (bench Co.)

翻訳：ロバート・ツェツシェ
編集：鈴木理映子
デザイン：山口良太

▶ PAチャンネル



詳しくはこちら

各作品の背景についてのレクチャー、
参加アーティストによるトークなど、
パフォーミングアーツ・プログラムを
多面的に体験するためのオンライン・
コンテンツです。

AICHI TRIENNALE 2022 Performing Arts

Adviser: Fujii Akiko, Maeda Keizo
Curator: Soma Chiaki

Production Manager: Shimizu Tsubasa
Coordinator: Muramatsu Satomi, Taniguchi Yuko
Shibata Haruka, Sugai Kazuki
Technical Coordinator: Ozaki So

Ticket Administration: Comori Aya (bench Co.)

Translation: Robert Zetzsche
Editor: Suzuki Rieko
Designer: Yamaguchi Ryota

2022年7月30日|土|— 10月10日|月・祝|[73日間]

芸術監督：片岡 真実 (森美術館館長、国際美術館会議 (CIMAM) 会長)

主催：国際芸術祭「あいち」組織委員会

助成：一般財団法人地域創造

愛知県政150周年記念事業



AICHI TRIENNALE 2022: STILL ALIVE

July 30 (Saturday) to October 10 (Monday, public holiday), 2022

Artistic Director: Kataoka Mami (Director, Mori Art Museum/President, CIMAM)

Organized by Aichi Triennale Organizing Committee

Supported by Japan Foundation for Regional Art-Activities